

安全って、本当ですか？ 2011年 3/26 ニュース第12号

武田薬品湘南新研究所を問う！

(発行): 武田問題対策連絡会 <http://www.shounan.biz/>



武田薬品研究所竣工式当日の抗議行動 (村岡東の研究所正門前で 2/19)

武田薬品研究所の安全操業求め

2/28 武田長谷川社長に7項目の要請書提出

4月から経済同友会代表に就任する長谷川閑史社長の道義的責任と、武田薬品工業の企業としての社会的責任を鑑み、健康と安全を願う市民の立場から改めて要請書を提出し、3/20までに文書による回答を求めた。

<主な要請事項>

- ① 実験動物の焼却について、屍体の運搬並びに委託先焼却炉の安全運転に万全を期すこと。
- ② 危険なP3実験は、人口密集地にあり、隣に大病院もある新研究所では実施しないこと。
- ③ 市民とのリスクコミュニケーションについては、限られた近隣自治会町内会ばかりでなく、排水排気等で影響を受ける住民も参加できる、市民参加の安全協議会を設置するよう協定の改定をおこなうこと。自治会町内会と不安を感じる市民を分断するようなやり方は認められない。また、創薬・バイオ・動物実験等に十分な知見を有しない市民に加えて、専門家の参加が可能な安全協議会とすること。
- ④ 研究所排水については、住民協定を守り、自社処理設備を設置すること。業界のリーディングカンパニーとして、住民との協定を守るとともに、同協定を遵守し観光地江の島の環境を守るために努力している藤沢市内50社から貴社だけが離脱し足並みを乱すことのないよう、貴社が社会的良識を発揮されること。
- ⑤ 排水・排気の管理方法については、処理方法、管理方法、検査方法についてもっと厳しく改めること。
- ⑥ 日本最大の動物実験をおこなうといわれる貴社研究所に於いて、動物実験の削減を含む3Rの実践を率先して行いその進捗状況を公開すること。あわせて、動物実験委員会に第三者の専門家を加えること。
- ⑦ 排水、排気、動物実験など公害防止施設について、希望する市民の見学会を実施すること。市民生活の安全にとって一番関係あるこれらの施設を見学し理解することが不可欠。



武田薬品東京本社前での抗議行動(2/28)

期限を5日過ぎた3/25現在、武田長谷川社長からの回答は届いておりません。

(文責 武田問題対策連絡会代表 小林麻須男)

バイオハザード予防市民センター代表幹事新井秀雄氏に聞く 専門家から見た武田薬品研究所見学会の感想

武田薬品研究所の見学会が2月20日行われ、同研究所の一般見学会に訪れたバイオハザード予防市民センター新井秀雄氏に専門家の目から見た感想をお聞きした。以下はその抜粋である。



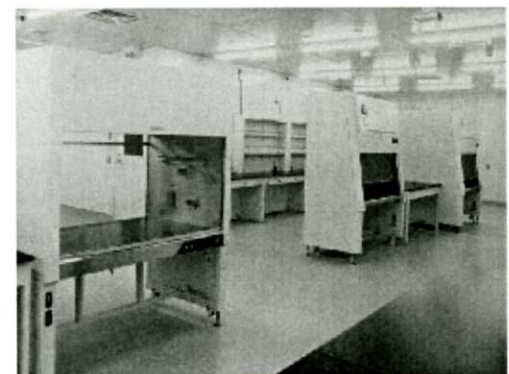
左から集中の片田記者、一人おいて本田孝義、右端新井秀雄の各氏（研究所入り口で 2/20）

①、見学コースは、玄関エントランス—保育室—展示コーナー—生化学実験室—休憩室—合成実験室—P1—P2—社員食道—退出の順。実験室内には施設的な備え付け機器（ドラフトチャンパー、安全キャビネット、実験台、流し）はあるものの、設備的な可動機器（オートクレープ、冷蔵庫、遠心機等）は皆無の状態だった。

②、P2 実験室で注目されたのは、壁際に設置された安全キャビネットの上部に付いている排気ダクトが水平方向に曲がって開口し、室内に排気する構造になっていなかった点である。感染研のP2 実験室、特に大部屋方式のP2 実験施設の安全キャビネットはすべてこの室内排気の構造になっているが、武田の湘南研のP2の安全キャビネットは、見学できた実験室のみならず、全てが実験室内へ排気されるタイプでなく、屋上から強制排気される構造と推測される。となると、いままで主としてP3実験施設の強制排気に注目してきたが、これからは、遺伝子組み換え実験などが行われるP2 実験施設についても、P3 同様に周辺住民に対する危険性（バイオハザード）を問題としないわけにはいかない。

③、見学の途中で、プロジェクトリーダーの野村一彦さんを紹介されたのでP3実験について聞いてみた。将来的にP3での病原体実験が要請されたときには対応せざるをえないとのことであったが、しかし日常的にP3施設にて病原体を取扱い実験していないのであれば（武田は、この研究所でのP3施設で当面病原体取扱い実験をする予定はないと声明している）、緊急に要請があったからといって、迅速に取扱いが開始できるわけにはいかないで、武田が行うP3取扱い実験のすべてを山口県光工場（ワクチンの製造施設があり、日常的に病原体を取り扱っている）へ集約する考えはないのかと質問してみたが、今のところそのような考えは出ていないとの回答であった。

④、注目していた排水施設そのもの見学はできなかった。展示パネルの説明によれば、水質モニターとして、TOC、水温、pH（水素イオン濃度）が載っていたが、それ以上の詳しいことは掲載されていなかった。また、実験室から1日あたり1,050立方メートルくらいの排水が貯留することになっている一次貯留槽について説明を求めたところ、この一次貯留槽は地中への埋込み式の貯留槽であるとのことであった。最新のバイオ施設では地面から架台で支えたタンク式にすることで漏水を発見し易くするのが通常と理解していたので、この点で武田の湘南研のそれが地中埋め込み方式であるのは驚きであった。



生化学実験室

⑤、帰路、守衛室へ立ち寄ってみたが、TOC、水温、pHの表示のみであった。また、守衛室には風向の自動表示があったが、研究所施設のどこに風向計があるのかが分からないとのこと、今回は、「集中的な管理室」の見学はできなかったため、後日、施設が稼働する前にその辺の確認ができるような見学が実施されることを要望してきた。

構成：「安全って本当ですか」ニュース編集部

